

研究課題：高齢者歯科医療におけるインシデントの収集と原因分析・改善策について

研究者名：中島 丘^{1) 2) 3)}、浅野倉栄¹⁾、三宅一徳¹⁾、山本真樹¹⁾、岡田春夫¹⁾、磯部博行¹⁾、加藤喜夫¹⁾、
長坂 浩²⁾、深山治久³⁾

所 属：¹⁾ 横浜市緑区歯科医師会、²⁾ 明海大学歯学部総合臨床医学講座麻酔学分野、
³⁾ 鶴見大学歯学部歯科麻酔学講座

1. 研究目的

国立社会保障人口問題研究所の将来推計人口によると、65歳以上の高齢者の占める割合は平成27年26.9%、平成37年には30.5%となると予測され、全身的に問題を抱える有病者の受診も増大することは明白である。本研究は高齢者歯科医療の場に発生しやすいインシデントの症例を集積・分類して実態を正確に把握し、安心、安全な高齢者歯科医療を確立させることを目的として行った。

2. 研究方法

インシデントを正確に把握、分析しアクシデントに悪化させない活動として事例収集を行った。対象は横浜市緑区歯科医師会・青葉区歯科医師会に所属する187施設（緑区59施設、青葉区128施設）で「調査用紙」を送付、郵送にて回収した。調査対象者は65歳以上の高齢者とし、その対象期間は平成19年4月より平成20年10月までの19か月間、調査時点は平成20年10月末とした。記載事例は院内で発生したすべての望ましくない事象とし、医療行為とは関係のない一般的なインシデントも含めた。なお、インシデントとは事故に至らない“ヒヤリ”としたり“ハット”した経験とし、アクシデントは医療行為の中で発生するトラブルで損害が既に発生しているものと定義した。

3. 結果

横浜市緑区歯科医師会会員施設39施設（回収率66.1%）、青葉区会員施設58施設（回収率45.3%）の合計97施設（回収率51.9%）から回答があり、65歳以上の高齢者に係る116件のインシデント、34件のアクシデントが収集できた。インシデント事例の“業務の内容別”の件数は、診療補助16件（13.8%）、補綴14件（12.1%）、保存12件（10.3%）、受付・対応10件（8.6%）、投薬9件（7.8%）などであり、その該当職種は歯科医師56件（48.3%）、歯科衛生士29件（25.0%）、受付17件（14.7%）、歯科助手11件（9.5%）であった。同様にアクシデント事例では、保存6件（17.6%）、投薬6件（17.6%）、口腔外科4件（11.8%）、受付・対応3件（8.8%）、説明・同意、インプラントが各2件（5.9%）であり、職種は歯科医師17件（50.0%）、受付4件（11.8%）、歯科衛生士3件（8.8%）、歯科助手3件（8.8%）、不明1件（2.9%）、無回答4件（11.8%）であった。それぞれの原因は、確認不足、不注意、うっかりミス、思いこみなど多岐にわたっていた。しかし、両者とも報告を義務づけているのは42施設（43.3%）、事例を分析しているのは12施設（12.4%）、今後分析を予定しているのは21施設（21.6%）と少数であった。

4. 考察

以上から本研究は個人開業形態の歯科診療機関からの高齢者のインシデント事例収集の契機となった。各施設はインシデント・アクシデントの報告や分析は十分にはおこなわれていなかった。また、それらの改善策としてスタッフ教育や指導の充実、診療プロセスの改善などヒューマンエラーを回避することを目標としていた。インシデント・アクシデントの経験事例の収集・分析は、その結果を報告者や他の医療従事者にフィードバックすることで情報を共有し医療事故の防止に役立つことができ、歯科医療における安全意識の向上が期待できうと考えられた。今後、本結果を効果的にフィードバックしていく方策を検討していく必要があると考えられた。

5. 結論

インシデントについての情報の共有化を図り、事例を集積・分析・対策を講じる一連のシステムを構築する必要があると考えられた。